

## アメリカのアキレス腱

【訳者注】近未来の予想まで含め、筋が通ってわかり易い現状分析ではなからうか。このロシア系アメリカ人の、真剣だがからかいを含んだ筆致は、アメリカのつくり出した事態が深刻であるにもかかわらず、明らかに終末的でキチガイじみていることを、よく反映するものと思える。この未来予想図はほとんど間違いないであろう。

一つ前の P・C・ロバーツ論文の、モスクワの戦勝 70 周年記念パレードへの言及とも併せ読んでいただきたい。このパレードが単なる示威的なものでなく、むしろ神の側に立つ宗教的なものだというオーロフの指摘と、かつてのロシアでの“自然発生的大行進”についての説明には胸を打たれる。この欄に紹介はしていないが、「ロシアのパレードを見て私が泣いた理由」という William Engdahl という人の文章があることも、ここで言っておきたい。ともかくも、西側の反露プロパガンダがいかに陋劣なものであるかが、ここでわかる。

By Dmitry Orlov

May 12, 2015

先週土曜日（9日）、ナチス・ドイツの赤軍への降伏と、ベルリンの国会議事堂へのソ連旗掲揚の、70周年を記念する壮大な戦勝パレードがモスクワで行われた。このパレードには通常でない側面がいくつかあり、それが西側の公的なプロパガンダ物語とは食い違っている。これを指摘したいと思う。まず、このパレードに加わったのはロシア軍だけではない。他の10か国の部隊がそこに参加した——中国の儀仗兵、それにインドの近衛兵がいた。これらの国家の要人たちがスタンドに席を占め、中国の習近平とその夫人が、ウラジミール・プーチン大統領の隣に座り、プーチンはパレードの始まりのスピーチで、一極世界を作ろうとする試みに警告をした——アメリカとその西側同盟国への真正面からの痛烈な言葉だった。2番目に、赤の広場を通り抜け、あるいはその上空を飛ぶ軍事的ハードウェアの様子は、相互自滅の核戦争は別として、アメリカ軍がロシアに投げつけて、ロシアがこれを無力化できないものはない、と思えるほどのものだった。

<https://youtu.be/yWsZ1U21nvI>

ロシアを孤立させようとするアメリカの試みは、その正反対の結果になったようである。もし、世界の最大の経済大国を含み、約30億の人口を擁する10か国が、相互の違いを捨ててロシアと肩を組み、アメリカの地球支配計画に立ちはだかる意欲を示すならば、アメリカ

の計画がうまくいかないのは明らかだろう。西側のメディアは、西側のリーダーたちが、怒ってか、オバマの忠告によってか、この祝典に参加を拒否した事実には焦点を当てた。しかしこれはただ、ヒトラーの撃退にせよ、70年後のその記念パレードにせよ、彼らが結合しても太刀打ちできないこと示すだけである。にもかかわらず、スピーチの中でプーチンは、特にフランス、イギリス、アメリカの人々に対し、この戦争に力を尽くしてくれたことを感謝した。私は彼がベルギー人を省略したことを残念に思う。彼らはダンケルクで大きな働きをしたのだから。

にもかかわらず、このパレードの一つの小さな事実に、人は心を打たれた：——防衛長官のセルゲイ・ショイグ (Sergei Shoigu) はチューバ仏教徒であり、最も尊敬されているロシアのリーダーの一人で、防衛長官になる前に危機管理庁の責任者だった人だが、この人が彼の前任者の誰もがやったことのないことをやった——式典の始まりに、彼はロシア正教のやり方で十字を切ったのだ。この単純なジェスチャーがこのパレードを、華麗な軍事的ショーから聖なる儀式に変えてしまった。それから、2本の旗を並べて捧げ持った、ゆっくりした行進が始まった。それはロシア国旗と、70年前の戦勝日に、ベルリンの国会議事堂の上に翻ったソビエトの旗だった。この行進には、よく知られた第二次大戦の歌が伴奏された。そのタイトルは？「聖なる戦い」であった。そのメッセージは明らかである。ロシア軍とロシアの民衆は、神の仕事をするために、自らを神の手に委ね、再び自らを犠牲にして、世界を悪の帝国の略奪から守ろうとしているのだった。

<https://youtu.be/3ps2jv0NpD8>

もしあなたがこれをすべて、ロシアの国家プロパガンダだとして一蹴しようとするなら、知っておくべき別のことがここにある。あなたは自然に組織された大行進のことを聞かれらことがあるだろうか？ それは公的なパレードの後で、50万人におよぶ人々が、第二次大戦で死んだ近親者の肖像を持ってモスクワを行進した出来事のことだ。この出来事は“永遠の連隊”と呼ばれ、同じような行進がロシア中の多くの都市で起こった。参加者の総数はほぼ400万と見積もられている。西側の新聞はこれを無視、あるいは反欧米感情を煽り立てるプーチンの試みだと宣伝した。その種の“新聞報道”こそ、純粋なプロパガンダである！実はそれは、純粋な大衆感情の熱烈で自然な流出であった。少しでも考えてみるならば、これほどの規模の出来事が、人為的に企んでつくり出せるものではなく、何百万もの人々が、自分の死んだ家族をプロパガンダに利用するなどという考えは、どう見ても、人を冷笑するもの、侮辱するものである。

[https://youtu.be/B8tmji\\_2Q3w](https://youtu.be/B8tmji_2Q3w)

\* \* \*

静かに崩壊する代わりに、アメリカはロシアとの戦争を選ぶ決意をした。彼らはすでに戦いに負けたように見えるが、こういう問題が残っている——「アメリカは、これ以上どれだけ多くの国を破壊すれば、彼らの不可避の敗北と崩壊の現実が見えてくるのだろうか？」

昨夏、プーチンは **Seliger youth forum** での講演でこう言った——「私には、アメリカの手に触れるものは何であれ、すべてリビアかイラクのような結果となるように思える。」実際アメリカ政府は、次から次へとよその国を滅ぼし、馬鹿騒ぎをしているようにみえる。イラクはバラバラにされ、リビアは足を踏み入れられない場所となり、シリアは人道的悲惨そのものとなり、エジプトは大量投獄を計画する軍事独裁国家となった。最も新しい失敗はイエメンで、そこでは親米政府が最近、覆され、閉じ込められたアメリカ国籍者たちが、脱出し本国へ返してもらうのに、ロシアと中国による救出を待たねばならなかった。しかしロシアが中国と共に、アメリカが一線を越えたので、後は自動的なエスカレーションしかないという信号を出すに至ったきっかけは、それより前のウクライナでの、アメリカ外交政策の大失敗であった。

ロシアの計画は、中国、インド、そして多くの世界の国々と共に、アメリカとの戦争に備えること、しかしそれを避けるための、可能なあらゆる手を尽くすことである。時はロシアの側についている。なぜなら一日一日が過ぎるごとに、彼らはより強くなり、アメリカは弱くなっているからである。しかしこのプロセスが進行する間に、アメリカは更にいくつかの国に“手を出し”それらをリビア・イラク状態にするかもしれない。次の番はギリシャだろうか？ 今は犠牲の子羊として **NATO** メンバーになっているバルト諸国（エストニア、ラトビア、リトアニア）を、犠牲にするというアイデアはどうだろうか？ エストニアは、ロシアの 2 番目に大きい都市、サンクトペテルブルグからわずかの距離にあり、そこにはロシア人の大人口がおり、大多数がロシア人の首都がある。そしてそれは激しい反ロシアの政府をもっている。これら 4 つの事実のうち、1 つだけが矛盾している。それは自己破壊する運命なのだろうか？ ロシアの腹の下にあって、ロシアをくすぐる、いくつかの中央アジアの共和国もまた、“手を出す” のにちょうどよいかもしれない。

アメリカが可能な限り長く、弱い、搾取可能な国々に“手を出し”、世界中で悪行をつづけるであろうことは、疑問の余地がない。しかしもう一つ問うてみる価値のある別の疑問がある——アメリカは自分自身に“手を出す”だろうか？ もしそうだとしたら、爆弾で荒廃した荒地に作り替える次の対象は、アメリカ自身になる。この選択について考えてみよう。

ファーガソンの、そしてもっと最近、ボールティモアの事件が示す通り、アフリカ系アメ

リカ人と警官の間の緊張関係は、爆弾攻撃もあり得るところにまでエスカレートしている。アメリカの“麻薬への戦い”は、本質的には、若い黒人（とラテン系米人）への戦いである。若い黒人の約3分の1が刑務所にいる。彼らはまた警官によって銃撃されるリスクが高い。公平に言えば、警官もまた若い黒人男性によって撃たれるリスクが高く、これが警官の過剰反応を招いている。次第に崩壊していく経済を考えるなら——1億近い労働年齢のアメリカ人が失業している（厳密に言えば“労働戦力外”）——官憲との協力がもはや有用な戦略でなくなった人口の部分が、ますます増えていくのではないかと思われる。すなわちあなたは監禁されるか、何らかの方法で殺される。

アメリカのメディアの、市民騒乱や反乱についての情報を遮断する能力には、面白い不均衡が見られる。もしそれが海外で起こっているなら、そのニュースは注意深く修正されるか、ズバリ切り捨てられる。（アメリカのテレビが、最近の、ウクライナ軍による市民居住区砲撃の再開について、何かを報じていただろうか？ もちろん否である！）これが可能なのは、アメリカ人が悪名高い自己中心主義者で、世界の他の場所にはほとんど関心がないからである。世界の他の場所を、彼らの大多数はほとんど知らず、知っていると思っていることは、たいてい間違っている。しかし、もし騒擾事件がアメリカ国内であれば、いろいろなメディアが、それをよりうまく扇情的なニュースにしようと競争し、購読（視聴）者と広告収入を増やそうとする。アメリカの主流メディアは、一握みの大きな複合企業によって厳重に統制されていて、情報に関する独占企業をつくっているが、宣伝するレベルでは、市場原理が依然として支配している。

だからそれは、プラスのフィードバックの環をつくり出す潜在力をもっている。つまり、より多くの市民の暴動は、より多くの扇情的なニュース報道を生み出し、それがまた市民の暴動を増幅させる。するとそれが更にニュース報道を扇情的なものにする。更にもう一つ、プラスのフィードバックの環がある。市民の暴動が増えるほど、警察はそれをコントロールしようと過剰に反応して、より多くの怒りを煽り、市民の暴動を倍増させる。これら2つのプラスのフィードバックの環は、どこまでも続いて、コントロールが一時的に利かなくなることもあるが、すべての最近のそのような事件では、最終結果は同じである。つまり州兵が導入され、夜間外出禁止令と戒厳令が布かれる。

軍隊の迅速な導入は、ほとんどの警察機関が、小さな町のものでさえ、最近では重装備していて、ある学区では、安全保障担当員でさえ軍用車と機関銃をもっていることを考えると、少し奇妙に思えるかもしれない。しかしこの成り行きは自然なものである。一方においては、習慣的に野蛮な武力に頼っている人々が、それに効き目がなくなれば、当然、その威力が十分でないからだと思うだろう。他方において、刑事裁判システムがもはやお笑い劇で、マヤカシになっているとすれば、なぜさっさと赤テープを切って、戒厳令を布かないのか？

アメリカにはすでに、あらゆる種類の武器が大量にあり、アメリカが資金不足になって、海外の基地を閉鎖せざるを得なくなると、更に多くの武器がたえず本国にもたらされるだろう。そこで彼らはおそらく、赤レンガがボストンにもたらされて使われたのと、同じ理由で同じように、その状態に慣れることだろう。ご存知のように、多くの赤レンガが英国船に積まれてボストンに大量に入ってきた。それは船のバラストに使われていたものだった。これを何かに利用できないかと誰もが考えた。しかしこれを建築に使うというのは難しく、技術を要求した。そこで解決策はレンガを歩道の舗装に使うことだった。同様のことが、外国からアメリカへ帰ってきて、あふれかえる軍事ハードウェアについても起こるだろう。それは、そこに存在するがゆえに使われるだろう。そしてそれは、考えられる最も愚かな使い方をされるだろう——自国民を撃ち殺すことだ。

しかし軍隊が、自国民を撃ち殺せという命令を受けたとき、悪いことが起こる。遠く離れた国の“タオル頭”を撃つのと、通りの向こうの、あなたが育った町の、あなたの兄弟かもしれない誰かを撃つと命令されるのとは、全く別である。このような命令は **fragging** という結末を招く。フラギングとは命令した上官を撃ち殺して、敵方に立つことである。

そうなると事態は面白くなる。なぜなら、もしあなたが長い間、無防備な市民を撃ったり、投獄したり、いろいろに虐待していれば、そのお返しは武装蜂起である。それを最も組織しやすい場所は、収容所の中である。アメリカの黒人の3分の1をぶちこんでおけば、効果的な反乱を組織するのに必要な機会は、彼らすべてに与えられるだろう。

反乱が効果的であるためには、たくさんの武器が必要である。ここにもまた、ほとんど日常的になってしまった、軍事技術を習得させるときに起こることがある。ISIS が使っているのはどんな武器か？ もちろんそれはアメリカの武器で、アメリカがバグダッドの政権に支給したものを、イラク軍が戦闘を拒否して逃亡したときに、ISIS がこれを戦利品として奪ったものである。またイエメンで、フーシ派反乱軍が使っているのはどんな武器か？ もちろんこれもアメリカのもので、アメリカが、今は倒された、そのプロ・アメリカ政権に支給したものである。また、シリアの、バシャード・アサド政権の使っている武器の一部はどういうものか？ もちろんアメリカのもので、ウクライナ政府がアメリカから貰ったのを、彼らに売りつけたものである。ここには一つのパターンがある：——アメリカ政府がある軍隊に、武器を与えて訓練し、装備をさせるたびに、その軍隊は全くやる気をなくしてしまうことが多く、その武器は、アメリカの利益に逆らってこれを使う者たちの手に渡るのである。アメリカがひとたび、自国の多くの部分を軍事占領下に置いたとき、この同じパターンが現れないと考えることは難しい。

そして事態が本当に面白くなるのはそこからである——十分に武装し、十分に組織された反乱が始まり、それは完全に過激化され、怒りに燃え、何も失うもののない人民からなっている。彼らは自分の土地と家族を、“手を出した”あらゆる国で見事に失敗したばかりの、墮落し敗北したアメリカ軍から守ろうと、身構えて戦っている。

「官庁を相手に戦うことはできない」(You can't fight city hall) という諺がある。しかしもしあなたが、官庁の周囲の 4 つの交差点を制圧する戦車部隊をもち、あらゆる方向に銃座を設置し、動くものは何でも撃てるとしたらどうだろう？ そして、十分な歩兵をもち、歩き回って、すべての重要な官僚の玄関ベルを鳴らすとしたらどうか？ その場合には、官庁との戦いにも、勝利の目が見えてくるのではないだろうか？

アメリカはこのシナリオが展開する前に、更にいくつかの国に“手を出す”かもしれない。しかし(全面的核戦争の可能性は除くとして)最後にアメリカは、自分自身に“手を出す”可能性が大きく、そうなれば、先の土曜日(9日)に、赤の広場を行進した軍隊をもつすべての国は、もうこれ以上、暴れまわるアメリカを相手にすることはなくなるだろう。

<https://youtu.be/rWJM2wZb1Ew>

(ドミートリ・オーロフは、ロシア系アメリカ人のエンジニアで、「アメリカにおける潜在的な、経済的・生態学的・政治的衰退と崩壊」に関する問題、彼が「恒久的危機」と呼んでいる問題について書いている。<http://cluborlov.blogspot.com/>